

子どもの仲間入り方略に関する生態観察 — 仲間入り行動における相互作用のプロセス —

文京女子大学大学院 人間学研究科 渋谷キミエ

Children's Strategy to Join a Group in Ecological Observation Interactional Process about Children's Behavior to Join a Group

Graduated School of Bunkyo Women's University SHIBUYA, Kimie

実際のところ、子どもはどのように参加行動と受け入れ行動をしているのか。大人の介入しない自由な遊び場、崖と崖下のせせらぎに遊ぶ子どもたちの生態観察を行った。その結果、事例1.崖遊びの仲間入り方略は、1.には「かけ声」である。緊迫した場面で掛けられるナンセンス語で、緊迫を和らげハブニングを楽しんでしまう作用がある。参加児(6歳)のタイムリーなかけ声応答が仲間入りのきっかけとなった。2.にはグループの「救援行動」が参加児の受け入れに繋がった。事例2.草舟レースではジャッジ(審判)の「役割」を参加児が指示され従ったことである。役割に従いながら、グループの草舟を追い、速い草舟をつくるなど独自の獲得的行動によってレースに参加できる成員の仲間入りが出来たのである。仲間入りすることと異なり、グループの成員として定着するためには仲間活動の中で役割を見付けることが重要である。

【キーワード】相互作用, 役割, 参加行動, 応答行動

How do children behavior to join a group and to accept a stranger into their group? This study observed children's nature play (only children) by ecological approach in the woods. First case was observed that four older children's group members slid down the steep slope and one younger child wanted to join their group. At first, the younger child slid down another slope near them. One older child intentionally passed in front of him when the child wanted to climb a steep slope to slide down again, and he followed the child. And then two older children failed to slide down it. He helped them. One older child said nonsense word and he answered same nonsense word to the child. Everyone roared with laughter and he could join them. Second case was observed that some children made their ship of bamboo grass and one child was looking at them near there. And then they decided to have a race in their ships, but they didn't have a judge man. They asked to him, "we want you to help us". He joined and judged their race. After he judged the race, he joined the race as a racer. It was important that stranger could find a role in a group when he or she wanted to join the group.

【Key Words】Interaction, Role, Joining behavior, Accepting behavior

緒 言

今、幼稚園、学校での仲間との関係が稀薄になり、いじめなどの問題が新聞社会面で大きく取り上げられている。仲間の競争の場でもある幼稚園、学校から離れた特に自然の美しい遊び環境での仲間遊びが重要な役割を求められている。学校以外の仲間との相互交渉は子どもの社会性の発達に重要な影響をおよぼすようになることから、子どもが管理されていない自由な遊び環境、自然や公園などの遊びへの関心が高まっている。

したがって、遊びを大人が介入したり統率しない、自然や公園で自由に遊ぶ子どもグループへの仲間入りを実際に生態観察して検討することに意義がある。

自然観察による子どもの仲間入りに関する研究はあまりない。東(1996)によれば、新しい視点で子どもの綿密な行動観察を行ったのは、パーテン(1932)である。新たな人間の行動理解の方法をパーテンは遊びの場面の相互作用を観察でとらえた。田上(1993)の社会的スキルを明らかにして訓練により幼児が仲間集団に参加できるよう効果的な援助を論じた研究がある。

兄弟遊びが出来ない「ひとりっ子」の増加した現代にグループに入って遊びに参加することに、困難な子どもが少なくない。幼児に対人関係において必要な社会的スキルを身につけるため、当研究は効果的な仲間入りの対人行動を観察し検討を加え、現代の子どもの問題を解決しようとするものである。

そこで、実際のところどのように子どもは、遊びグループに仲間入りし、参加行動と受け入れ行動をしているのかを自然観察し調べた。観察場所は市街地を縦断している段丘崖と崖下の

せせらぎで半自然公園を選んだ。子どもたちに大人が介入しない自由遊びの状態をそのまま生態的観察を行った。

その結果、事例1.崖遊びの仲間入り方略の特徴は、次のようなものであった。

遊び場で突発的な状況ハプニングによって急速に仲間の絆が深まるのが、今回の観察データで得られた。事例1.には2種類の「かけ声」があげられる、緊張をほぐす「ナンセンスなかけ声」と「ヒーローのかけ声」である。崖登りでの転げ滑り落ちる年長児を、隣りを滑る年少参加児が留めようと押さえ、一緒に転がり落ちる年長児のかけ声「ふんにやら、ふんにやら」に「ふにゃ、ふにゃ」と参加児が応答してみんな笑いだした。この緊迫場面をエンジョイしてしまう「かけ声」の応答を参加児がとっさにして仲間入りを促進したのである。2.には、受け入れ児グループの「役割の獲得」があげられる。そばで遊んでいた幼児Cが崖から降りられなくなったが、グループ全員が救援に登り、受け入れ児が膝に参加児を抱いて滑り降りて来た。救援隊の役割は遊びから彼等自身で発見獲得した誇らしい「役割」で、子ども同士の信頼が育つ契機に繋がった。3.に「グループをまねる行動」が仲間入り方略では年少児、幼児、ともに観察された。最初はグループ周辺を崖を登ったり樹木につかまりして様子を眺めていた。すぐには成員にならず「入れて」など儀礼的な言葉かけによる参加行動はみられなかった。

事例2.の草舟レース遊びの参加児Pの仲間入り方略の特徴は、1.Pは最初から成員として仲間入りしたのではなく、草舟レースの進行過程を通して段階的に成員となったことである。2.には、グループ年長児、Bのジャッジの「役割」の指示をPが受け入れ「役割」を獲得したこと

である。3.「追いかける - 逃げる」行動は川への移動したグループをPが後から追い、せせらぎではグループ児とPとの追いかっこ遊びと遊びの間をつなぐ形で見られた。4.一方、男児による「力の誇示」が見られた。年長児たちが年少女児に草舟レースに負けた時、一瞬、認められずPの草舟が捨てられた、すぐに認める変化を示したものの、自転車で女児のいるせせらぎへ乗り込んで力を誇示した。いじめと違うところは年長児の面目を失墜させた時のみ起きた行動で身体に及ぶ接触は無かった。この後Aは心の葛藤を克服した「利他行動」を見せた。トンネルをつくってPをくぐらせ遊びを続けた。5.「トカゲの捕獲」小動物の捕獲は好奇心を刺激しグループを陽気にさせた。トカゲを不思議そうに眺めたり、借りっこして川を泳がせたりした。受け入れ児たちと参加児Pの心を結びつけトカゲ遊びの合間に菓子の分配がPにも見られた。

事例 1. 崖遊び (1)・(2)

対象児 S, Y, M, H.(男児.8歳児グループ)
T(男児.6歳児) C(男児.4歳児)

観察場所 台地の段丘崖

観察日時 1999年5月16日 AM11~12
晴れ

事例 2. 草舟レース遊び

対象児 P(女児.6歳6カ月)
A(男児.8歳) B(男児.7歳)
C(男児.7歳) 母親

観察場所 崖下のせせらぎ

観察日時 2000年5月3日 AM11~12
晴れ

観察方法

自然環境の遊び場面をビデオカメラ録画, カメラ, 予備インスタントカメラでの撮影

1.2.の状況の記述, 自然観察を行った
移動用具の運搬の補助者の援助

結果及び考察

事例 1. 崖遊び (1)

1. かけ声には2種類あった, 1つは気分の高揚した時発するヒーローのかけ声「オッパーイヤー」などの決めの言葉で文脈がきまっていた。SとYが一気に崖を滑り降りた時に叫ぶと, Mが叫んで崖を滑降する。見通しがきかない崖でのコミュニケーションでもあった。2つめのかけ声は緊張を和らげるナンセンス語である。文脈は決まっていない, 子どもがその時の雰囲気や気分が発するのである。

T(男児.6歳)の仲間入りの方略は, 最初グループの周辺での一人遊びであった。Mの後に登るうち頂上付近で転ぶハプニングが起きた。Tは年長児Yの襟を掴んで留めた, YはTの足に捕まった。Yの足には両手でMがかまった(図-1.参照)。Tに二人の年長児が掴まったので, TがYの上着を掴んだまま3人は一緒に転げ滑り落ちていった。Y「ふんにやら, ふんにやら」T「ふにゃ, ふにゃ」二人のナンセンスなかけ声の掛け合いはみんなが笑い出し一変に緊張を和らげた。スリルの楽しさはこんな時, 味わうのであろう。この事があって落ち着いた時にはTはすっかり仲間の成員の雰囲気になっていたのである(表1.参照)。

これは環境の担うところもあるかもしれないが, だからこそ, 子どもは面白い遊び場所を選び, 探して遊んでいると言える。必死にYを押さえたTと, Tの足につかまったYはこれより二人は親密距離で崖滑りを始めていた。Tの必死な行為とユーモアを年長児グループはハートで捉え仲間と感じたと捉えることができる。

事例 1. 崖遊び (2)

C (男児. 4 歳児) は年長児のまねをして崖を高く登り恐くて降りられなくなった。S.M.Y.H が「おいでー」と気がついて呼ぶが身動きできない、受け入れ児がそろって救援に登る、S が C を膝に抱いて滑り降りて来る(図 2.参照)(表 2.参照)。このあと C を囲むように年長児がそばに寄ってきた。最初、C は、受け入れ児たちのまねをして遊んでいる『よその子』だった。しかし、救援行動したことによって C に対し、かけがえのない近親感を受け入れ児たちは覚えた。グループの親しい仲間になるきっかけは参加児、受け入れ児双方という見方もできる。受け入れ児たちは救援の役割を自己に課し獲得した、参加児 C は信頼感を年長児たちに持った。年長児に囲まれたかけがえのない C はグループ仲間として遊び始めた。参加児と受け入れ児との信頼で結ばれた仲間入りであった。

事例 1. 崖遊び (1).(2)

C の仲間入りの方略は、年長児グループに近い場所での崖遊びのまねであった。出来るなりの崖の低い場所で遊ぶ方法であった(図-3 参照)。グループに声をかけることなく、グループ周辺をなんとなく登ってみたり、低い崖はだを滑るまねをしてグループの様子を眺めていた。年長児は、C の間を縫って滑っていた。C の行動を黙認して滑降のじゃまになるなど拒否的行動は示さなかった。

周辺にいることは意味が有ることで、参加児 T と C のグループへの仲間入りのきっかけを掴むことになる。

T の仲間入りの方略は、最初グループの周辺での一人遊びであった、自分がどのくらい崖を登れるか試みていた。M の後について登るうち頂上付近でハブニングが起きた。ところで、年

長児たちは T.C. をやはり何をしているか様子を眺め、仲間遊びの相手として面白いが観察していたのである。Y が T と親密距離で滑るようになったとき、Y は落ち葉の沢山ある滑りやすい場所を T と滑り教えている。T が崖の土の上を滑りにくそうにしていたのを見ていたが仲間できなかったから「こっちがいいよ」など声をかけなかったのである。仲間になるとはそのグループの利徳や知恵を与え共有し分配をされた時点とみなせるであろう(表 3.参照)。

事例 2. 草舟レース遊び

女児 P (6 歳 6 カ月) の仲間入り方略の特徴は、グループ男児 B が草舟レースのジャッジの「役割」を参加児 P に指示したことである。P は草舟レースの進行過程をとおして、レースに参加できる成員の仲間入りができたのである。そのプロセスは次のとおりであった。

P は男児たちの歓声と笑い声に誘われて噴水池にやってきた、グループ児に言葉かけはしなかった。せせらぎに移動した男児たちの後から距離を保ちついていた。P はせせらぎ、川、岸辺を男児の後からついて歩いていた。

最初の接近は P からの参加行動がみられた。急流遊びの時に近く距離を置いていた P が、ずっと男児の並んだ間に入っていった。リーダー A がよけて P の入れる場所を空けてやる応答行動をとった。

P の仲間入りの次ぎの段階は草舟のレースを始めるグループの B が「立っていてー」と P にジャッジの役割を指示した、P が B に従ってジャッジの役割を獲得したことである。P は具体的な役割をもって遊びに参加できる機を掴んだ。しかし、この段階ではレースに参加できる成員ではなかった。P に役割を与えたことは遊びの発展を左右させる受け入れ行動であった。グル

事例 1. 崖遊び (1) . (2) の遊び場面



Yの身体を押さえて助ける年少児 T
転げた Y が T の足に掴まり、T は Y の
襟を引っ張る。M は Y の足に両手で
掴まって滑り落ちる、

図 1.



に助けられ嬉しそうに滑り降りてくる C、H
は少年らしい凛々しい表情で幼児を見守っ
ている

図 2.












C は自分なりのできる途中から降りる体勢をとる、
周りの年長児は C にかまわず更に登っていく 図 3.

表1. 事例1. 崖遊び - (1)

状況 年長児と年少児が崖で転ぶ観察日

1999年5月16日(日) 晴れ AM11~12

S.Y.M.H(8歳)とT(6歳児) C(4歳児)の仲間入り行動		(時間)
(1)		1. T : 年長児の近くで一人で崖に登って遊びはじめる (21.58)
(2)		2. T : こわごわ崖を降り年長児の真似をしているが滑って転んでしまう (6.92)
(3)		3. T : 起きあがってゆっくり降りてゆくが、登ってゆく年長児 M の後からついて崖を登り出す M : T がついてくるのを黙認している
(6)		4. T : M がちょっと休むと嬉しそうな顔で M を見て近づいて来る (16.2)
(6)		5. T : 年長児に続いて滑り出すと Y が滑り転げたので T が襟を掴んで止めようとする Y : 滑り落ちながらあわてて T の足にしっかりつかまる M : 転げた一瞬 Y の足を両手でしっかりつかまる
(6)		6. T : Y の襟を必死でおさえている Y : に足を掴まれているのでずるずる滑り落ちてゆく M : 左手が Y の足から離れ右手で Y の足を掴んだままずり落ちてゆく
(6)		7. T : Y の身体を押さえて一生懸命助ける M : 両手が離れずり落ちてゆく
(10)		8. T.Y.M : 3人があつという間に転げ出した、T も Y を押さえきれずに 転げ出す
(10)		9. T : 落ちながら、思わず Y の上着の背中の辺を掴んでいる
(12)		10 Y : 上着を持たれたまま T と転げておちる 「ふんにやら、ふんにやら」とかけ声をかける T : 「ふにゃふにゃ」と Y に応えるとみんな大笑い
		11. T.Y.M : 奇声をあげ愉快的出来事を面白aggって楽しんでるように笑っている、
		12. T が Y の襟を持ち Y が T の手を持って崖の下に落ちて来た しばらくして落ち着いた時には 3人が仲間の雰囲気になっていた





* = 測定不能

表2. 事例1. 崖遊びー(2)

対象児 S・Y・M・H=男児8歳の年長児4名のグループ
T=男児6歳 C=男児4歳(仲間入りする年少児)

状況 年長児たちのCへの仲間的な行動

観察日 1999年5月16日(日)晴れ AM11~12

S.Y.M.H(8歳)とT(6歳児)C(4歳児)の仲間入り行動		(時間)
(2) 	(1) C : 母親と崖に遊んでいる年長児のグループを見ていたが走って崖に行き登り始めた	(4.0)
(4) 	(2) C : 崖を降りられなくなって途中で立ちどまって S.Y.M.H : 「おいでー」とCを年長児みんなで崖下から呼ぶ	(4.18)
(5) 	(3) T : Cのいる崖に登ってゆく	(4.26)
(6) 	(4) S.M.H : S.M.Hの順にCのいる崖の上に急いで登って行く C : 崖で身動きできない、年長児を待っている	(7.04)
	(5) S : Cを膝に抱きかかえ崖を滑り出す M.H : SがCをたすける様子を心配そうに崖の途中で見ている C : Sに抱かれて嬉しそうにしている	(14.27)
	(6) S : Cを崖下まで抱いて笑いながら滑り降りてくる C : 崖下までSに抱かれて笑って降りてくる、下に着くと嬉しげに走り出す M.H.Y : Cを囲む、安心したように笑っているがまた遊び始める Cはなんとなく年長児の後をついてあるく	(6.58)

対象児 S・Y・M・H=男児 8歳の年長児 4名のグループ

表3. 事例1. 崖遊び - (1)・(2)

T=男児 6歳 C=男児 4歳 (仲間入りする年少児)

観察場所 段丘崖

状況 年長児グループへの幼児の仲間入りプロセス

観察日 1999年5月16日(日) 晴れ AM11~12

S.Y.M.H(8歳)とT(6歳児) C(4歳児)の仲間入り行動		(時間)
	(1) S.Y.M.H : Y.M.S.Hの順に崖の草を掴み這うように崖を登ってゆく T : 年長児の後から追いかけるように崖を這い登る C : Tの登るのを見て崖の上に駆けて行く	(9.08) (16.58)
	(2) S.Y.M.H : 4人が固まり元気よく這いながら崖を登る、TとCが登るのを黙認して一緒に登っていく T : 年長児についてどンドン登って近づいて行く C : Tに遅れ追いかけるように這いながら登って行く	(19.18)
	(3) S.Y.M.H : Yが崖上に先に着いて崖の頂上にはい上がる M.H.Sの順に草を掴んで這いながら登ってる T : Yに続いて崖の頂上に元気よく登る C : 前に降りられなかったため、自分からこれ以上登れないと思ってか崖に座ってゆっくり滑り降りてゆく	(11.09)
	(4) S.M.H : 崖の途中の木に掴まって急な崖を頂上近くを上ってゆく	(13.75)
	(5) S.M.H : Hが木に登って揺らし景色を眺める、S.Mは頂上にあがる	(15.95)
	(6) C : 一度降りた崖を年長児の後をまた追うように這い登ってゆく	(20.44)
	(7) S.Y : 「オッパーイヤー」と歓声をSとYで掛け合い、弾みながら崖から滑り降りる	(9.79)
	(8) M : 腹這いになって崖を滑り降りる「オッパーイヤー」とS.Yと呼び合うように大きな掛け声を愉快にかける	(19.32)
	(9) T : 頂上までいったTが年長児の滑った枯れ葉のある所を選んでゆっくり滑り降りてくる年長児と同じにできたので崖下で来て嬉しそうに笑顔で走っていく	

ープ児たち 3 人には、P はレースの相手を脅かす存在に見えなかった。

レースの展開（表 4.参照）

レースの開始まではただ周囲で歩きまわっていた P が 1 回戦でジャッジにたった（図-4 参照）。ゴールのあと P がレースに加わりたくてスタートにもどるが 2 回戦のジャッジを A と B に指示された。P は不本意らしく振り返りながら戻る。この時点ではレースに成員として加われなかった。2 回戦は舟が沈んでしまう、ノーカウント、「まってー」とグループの男児 3 人を P が追いかけた。P はレースに加わりたかったことがわかる。

舟が沈んでしまい、子どもたちは、草を摘むが、P がグループ仲間と一緒に草を探しまわる。この時点は成員と同等行動であった。草が波にのまれると子どもたちはその都度新しい草を摘んで編んだ。3 回戦、4 回戦は男児たちと P が草舟を追いかけた、グループ児たちはそれを受け入れて自分でジャッジを行った。5 回戦は P がジャッジに進んで立ったが草舟が波にのまれてノーカウントだった。

グループそろって新しい草を探して摘んだ。P も菖蒲を結んで草舟をつくった。

6 回戦に P は積極的にスタートに行き年長児の間を割って初めてレースに加わった。P は成員と同じ行動を獲得的にとった。C がジャッジを自分でとり 1 位だった。

P が 7 回戦にレースに参加したこの時点でグループ成員と草舟レースのできる（P の念願する仲間遊び）仲間に入れた。P の菖蒲の草舟が 1 位になった。男児も P も予想しなかった結果だった。そこで下記の展開となった。

男児グループの力の誇示 自己制御力 受け入

れ行動

P が優勝したあと急に男児たちは草舟レースをやめて、男児グループによる P への「力の誇示」がみられた。男児の年長児が年少女兒に草舟レースに負けた時、一瞬、ジャッジのリーダー A は認められず女兒の草舟を捨ててしまうが、すぐに認めてあげる変化を示した。C が捨てた草舟を拾ってやると、A が P の草舟を 1 位の宣言を示し高く上げた（図-5 参照）。しかし、葛藤を見せるように男児グループは自転車で女兒のいるせせらぎへ乗り込んだ。力を誇示して P の周囲を乗り回した（図-6 参照）。いじめと違うところは年長児の面目を失墜させた時のみ起きた行動で P への身体に及ぶ接近は無かった。P が「あっちいってー」と追い払った。ここで、大人の不用意な注意が無いのがよかった。男児たちの自己制御力の方法（発散）だったからである。事例では、少しして、P がひとり遊びで泳いでいるせせらぎにグループ児たちがやってきた。A は不意に P の上に自分の身体をまるくして「トンネル」をつくってくぐらせた。「仲直りしょ」の受け入れ行動である。P は喜んでくぐって遊んだ（図-7 参照）。A は葛藤を自転車で克服して P に優しく行動する子どもに発達できた。B も P と泳ぎ、C も、P とグループで行列して波を蹴ってざぶざぶ明るく歩き回った。参加児と受け入れ児の相互作用で遊びがまた継続していった。男児たちの力の誇示の場面では、子どもの自己制御力を培う行動を抑制してしまわないよう、不用意な言葉で、いじめる悪い子の印象をその子に与えてしまう前に、展開を眺めるおおらかさが必要である。

リーダー A のトカゲの捕獲

グループの A がトカゲを捕えたことは好奇心を刺激しみんなを陽気にさせた。トカゲをみんな

事例2．草舟レース遊び場面



Pがジャッジに立っている、前からC.A.B順に草舟を追跡するグループ児

図 4



Aが捨てたPの1位の草舟を、Cが拾い上げてやると、一旦は捨てたPの1位の草舟を高く上げて認めるA，ほっとした表情になるP

図 5



Pが草舟レースに1位になると、男児グループは急にレースをやめ、自転車でPのいるせせらぎに乗り入れる、戸惑いよけるP

図 6



自転車をやめて、Pのところきたグループ、Aが茶目っ気をだしPにトンネルを作ると喜んで通り抜ける、Bも服を脱いで泳ぎ、更に遊びが継続していった。

図 7

表 4. 女児 P のレース参加へのプロセス

男児が草舟を流しをはじめるが P に「立っていてー」とジャッジの役割を与える . P は岩の上に立つと同時に仲間入りをする		
1 回戦スタート A ゴール	男児 .A.B.C. (参加) ジャッジ P 一緒に草舟レースに入りたそうについてゆくが「もう一回どーんする . たってて」とジャッジを指示される	
2 回戦 ゴール	男児 .A.B.C. (参加) ノーカウント P がたっているが舟が沈んでしまう	
3 回戦 ゴール	「まってー」 P がみんなを追いかける . 沈まないような新しい草を探す . 草舟を見せあって確認する P が 3 人の舟を一緒に追いかける	
4 回戦 ゴール	P がいないため .1 位の A が自分で手でサインを示す ~ P がばつがわるい様子 男児 .A.B.C. の草舟を P が一緒に追う A は自分の舟を高く上げ「これが 1 位だよ」と示す P が進んでジャッジにたつが舟が波にのまれてわからなくなる ノーカウント	
5 回戦 ゴール	新しい草を探してそれぞれ自分の舟をつくる P が菖蒲を結んだ舟を作る P と男児 .A.B.C. (参加)	
6 回戦 ゴール	C が自分で手をあげてジャッジし 1 位を示す P が参加する . 男児 .A.B.C. (参加) 男児 A がジャッジに立つ	
7 回戦 ゴール	P が 1 位になる . 男児 A が 1 位の P の舟を捨てるが C がひろってやる . 肩をすくめた P に対して A が 1 位を認めて高く示す .	

なが眺めたり , 借りっこして川を泳がせたりした。トカゲを捕獲した A は草舟敗退の雪辱を果たしたように嬉し気であった , なかでも P が珍しそうに眼を見張っていたが , トカゲを眺めながら B が菓子袋を開け仲間と食べた , P も菓子の分配を受けていた。小動物が子どもたちの心を結びつける働きが見られた。

草舟

草が波にのまれると子どもたちは新しい草を摘んで編んだ。子どもたちは科学的な選択と自然界の美しさを感性を働かせて選択していた。浮力のある枯れ枝を選んだ B は , 重量と水との

関係を考える行動で科学への入り口にいた。菜の花を草舟に選んだ A は好きな花で美しい舟を走らせた気持ち草舟に表現していた。P が男児たちを負かした草舟は , 菖蒲を結んだ草舟だった。菖蒲の水辺に咲く植物の水を弾く特性が生きた。結ぶことで葉中に空気をはらみ浮力を確保した。結んだ菖蒲は頑丈になった。P の草舟は感性による表現であり , 科学的にも合理的であった。C の円い葉を二つに折った舟は面積が浮力を大きくして 1 位を獲得する速度があった , 波にのまれてしまい菖蒲ほどの頑丈さは持っていなかったのが残念そうであった。

むすび

子どもが仲間に入るためには、入ろうとする子ども側でもいろいろな試みをしており、グループの方からも働きかけがある。仲間に入ることと、定着することは意味が異なるようである。グループの成員として定着するためには仲間活動のなかで「役割」をみつけることが重要である。

この観察は、あくまでも、自由な遊び場面での観察であるが、より構造化された遊び場面では大人や教師の介入する場面の約束ごと等によって、見えなくなる可能性がある諸側面を明らかにするための現在さらに観察を続行中である。

参考文献

- 東 洋(編). (1996). 発達心理学ハンドブック. 福村出版.
- 原 孝成・片岡美菜子・謝 文慧・祐宗省三. (1994). 幼児の仲間入りに関する研究. *幼年教育年報*, **16** 巻, 27-32.
- 住田正樹. (2000). *子どもの仲間集団の研究*. 九州大学出版会.
- 田上不二夫. (1993). 幼児が遊びに参加するときに必要な対人行動. *カウンセリング研究*, **26**, 123-127.